P15

小児における永久歯の異常に関する研究
～北九州市内における統計調査～

○塩野康裕、藤田優子、空田安博、橋本敏昭、後藤翔太、牧憲司
九州歯科大学　機能育成制御学講座　口腔機能発達学分野

【目的】本研究の目的は、近年の小児における永久歯の異常の発現率が、数十年前と比較して増加しているという仮説の真偽を検証することである。【方法】1990年から2010年3月までに九州歯科大学小児歯科及び北九州市内の2件の小児歯科医院に来院した、5歳から19歳までの男女1679人(男児822人、女児857人)のパノラマ及びデンタルエックス線写真をもとに永久歯の異常に関する調査を行った。【結果】1679人のうち、377人(男児201人、女児176人)に永久歯の異常が認められた(22.4%)。中でも先天性欠如歯は発現率が13.6%と最も高かった。欠如歯の数が最も多かったのは、下顎第二小臼歯、次いで下顎側切歯であった。過剰歯は88人(男児71人、女児17人)に見られた(5.2%)。矮小歯は9人(男児4人、女児5人)にみられた。9人すべてに側切歯が含まれていた。上顎側切歯に片側性に矮小歯が認められた5人のうち4人は、反対側の側切歯が先欠であった。萌出障害については、男児21人、女児16人に認められた。上顎犬歯が最も多く、37人中13人に萌出障害がみられた(35.1%)。13人中12人が10代であった。【考察】本研究における先天性欠如歯及び過剰歯の発現率は、国内外の過去26編の論文と比べ高い割合で認められた。したがって小児では定期健診によって永久歯の異常の有無を確認し、先欠歯や過剰歯が発見された場合、健常な永久歯列育成へ対応を考慮してゆく必要がある。萌出障害は2.2%で発現した。萌出障害の原因に過剰歯、嚢胞、歯牙腫が認められたことから、萌出遅延や埋伏歯は早期診断を行い、適切な時期に適切な処置を施す必要があると考えられた。

P16

6歳児から13年間の咬合育成を行った一例

○伊東泰蔵[1]宮崎修一[2]板家智[3]
[1]いとう歯科医院（熊本市）
[2]みやざき歯科医院（八代市）
[3]伊東歯科口腔病院（熊本市）

【緒言】小児歯科医療は、乳歯列期から混合歯列期、そして永久歯列期へと正常に交換できることを目的としている。う蝕治療のみでなく永久歯萌出に障害となる生活習慣の把握と適切な治療が必要になってくる。そこで、今回咬合育成中において13年間の治療と観察によって歯列咬合を完成させることができたので報告する。

【症例の概要】

患者：6歳2か月（現在19歳）女児
主訴：上顎右側Eが痛い
初診日：平成10年7月

混合歯列期で、まず主訴の上顎右側Eの治療を行った後治療計画を立て実施した。

1）正中偏位の改善のため早期接触の除去と抜歯。
2）上顎左側中切歯埋伏の開窓術と牽引。
3）永久前歯の萌出後による一部の歯肉退縮。
4）本格矯正治療開始。
5）幼若永久歯の直接覆髄治療。
6）矯正治療終了と下顎智歯の抜歯

【まとめ】症例は、乳歯う蝕治療を行い、晩期残存により顎偏位の症状を認めたので正中一致のために抜歯と乳犬歯の削合を行った。上顎埋伏歯の牽引中は、う蝕予防などのコントロールを定期的に実施し、10か月で埋伏歯の萌出を認めた。初診から6年後の12歳時からは過蓋咬合と小臼歯埋伏の診断により矯正治療を開始した。矯正治療終了後には智歯3歯の抜歯を行って、以後は保定による経過観察中である。